

I 今年度の調査・分析結果

II 調査の活用

III 県学調のこれまでの成果

I 今年度の調査・分析結果

II 調査の活用

III 県学調のこれまでの成果

調査結果 「学力のレベル」の経年変化

○多くの学年・教科で、学年が上がるごとに、学力が伸びている。

○一方で、学力の伸びが小さい、または横ばいの教科や学年もある。

国語

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
現中3	15	18	20	22	23	25
現中2	17	18	21	22	22	
現中1	18	18	20	21		
現小6	16	19	19			
現小5	16	17				
現小4	14					

横に見ることで、
同一の集団の学力
の推移が分かる

算数・数学

学年	小4	小5	小6	中1	中2	中3
現中3	14	16	19	20	22	22
現中2	14	17	18	19	21	
現中1	15	16	17	17		
現小6	14	16	17			
現小5	13	14				
現小4	12					

英語

学年	中2	中3
現中3	25	28
現中2	25	
現中1		
現小6		
現小5		
現小4		

 ⇒ 今年度の数値

 ⇒ 今年度の数値

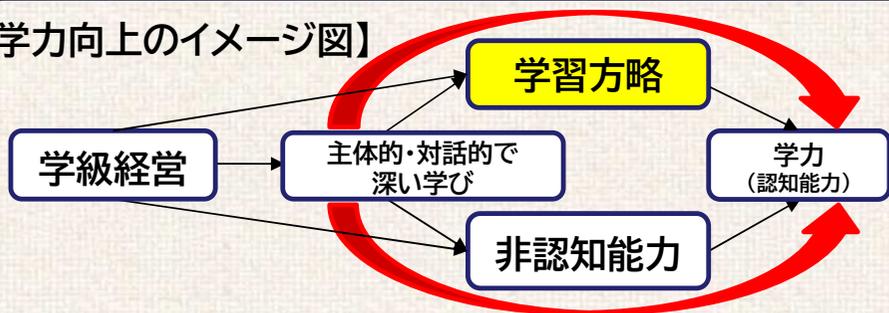
 ⇒ 今年度の数値

※小4～中3で「学力のレベル」は、36段階で設定している。

※表の数字は各学年の「学力のレベルの平均値」を表している。

分析結果① 努力調整方略の「伸び」と学力の「伸び」

【学力向上のイメージ図】



「苦手」などの感情をコントロールして学習へ向き合おうとする意識(努力調整方略)

※学習方略、非認知能力についての詳細は【資料】を参照

○努力調整方略は全ての学年・教科で学力の伸びと相関が大きい



※学習方略を伸ばした生徒が学力を伸ばした割合

努力調整方略の「伸び」× 学力の「伸び」

努力調整方略を伸ばすための取組例

振り返りの充実

できるようになってきたね。
次は何を頑張ろうかな。

苦手だけど
あきらめないぞ！



活動への取組を振り返ろう

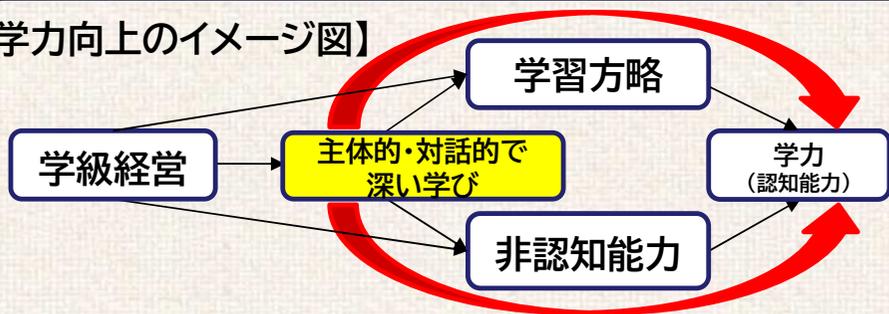
自分にとって大切なものが伝えられましたか。

相手が理解しやすいように使う表現を工夫しましたか。

Good!
メモばかり見せてしまって、あまり相手のことも見ながら話すことができなかった。次は相手を見ることを考えたい。

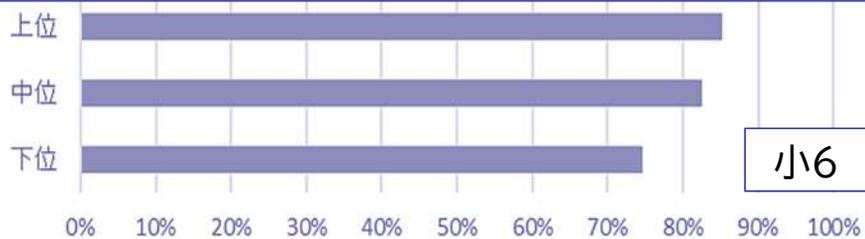
分析結果② 深い学びと学力

【学力向上のイメージ図】

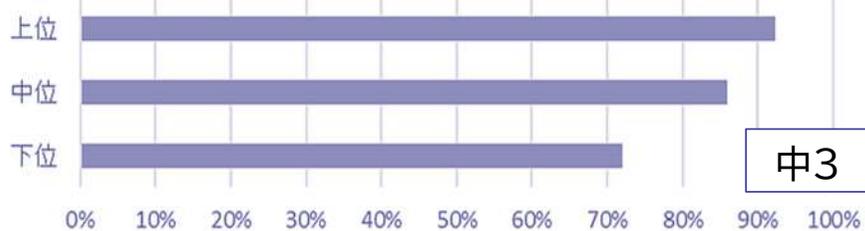


これまでに学んできた一つ一つの知識をつなげ深く理解したり、新たな考えを形成したりする学び等(深い学び)

○以前に学習した知識とのつながりを認識したことがある児童生徒ほど学力が高い



小6



中3

(「授業で学んだことが、以前に学習した知識とつながったことがどれくらいありましたか」という質問に対して「よくあった」「ときどきあった」と回答した割合)

以前に学習した知識とのつながり × 学力

深い学びを促すための取組例

前回の授業で学んだことを使って考えてみよう。

学んだことを使った話合い



あの考えを使えば、この問題ができそうだ!

前回の授業で学んだことはここにつながるのか!

I 今年度の調査・分析結果

II 調査の活用

III 県学調のこれまでの成果

県学調の活用

New

質問項目をいつでも学校で使える調査セットを作成
⇒子供の声をもとに授業改善！

「主体的・対話的で深い学び」の視点によるアンケート調査

- 県学調の質問から「主体的・対話的で深い学び」に関わる項目を抜き出し、新たに教員の意識と子供の意識を比較できるアンケートや集計表などを提供。
- 普段の授業を踏まえた教職員と児童生徒のアンケート結果をもとに、「主体的・対話的で深い学び」の視点から見付けた授業の良さを共有したり、改善する点やその改善方法を検討したりするきっかけとすることができる。

教員用		質問項目	回答	児童生徒用		質問項目	回答
1		子供の実態を把握した上で、子供が主体的に学べるような課題設定や授業展開、それらを踏まえた教材研究や授業づくりを意識したこと	←→	1		授業の始めに、今日はどんな学習をするのかをつかんでから学習に取り組んだこと	
2		授業の終わりに、子供たちが振り返る場面を設定したこと	←→	2		授業の終わりに、授業で学んだことをふり返り、自分がわかったことやわからなかったことを自覚したこと	
3		わからないことなどを質問しやすい雰囲気をつくられるように工夫したこと	←→	3		わからないことなど質問しやすい雰囲気です授業が行われたこと	

※「主体的・対話的で深い学び」の視点による質問調査の一部抜粋

「主体的・対話的で深い学び」の視点によるアンケート調査 活用事例

質問1 (教員用) (児童生徒用)

授業終わりに、子供たちが振り返る場面を設定した

授業終わりに、授業で学んだことをふり返り、自分が分かったことや分からなかったことを自覚した

教員の結果 **5**

教員も児童生徒も高評価

学級の集計結果 **4.6**

好事例を校内で共有

こんな工夫をしています。

視点を明確に

活動の後に一人で考える時間を確保

分からなかったことも振り返る

次の授業へ反映する



質問2 (教員用) (児童生徒用)

分からないことなどを質問しやすい雰囲気がつくれるように工夫した

分からないことなど質問しやすい雰囲気です授業が行われた

教員の結果 **4**

教員と児童生徒に差

学級の集計結果 **2.3**

意識のギャップ⇒授業改善の視点

(いつでも質問していいんだよ。)



(質問してみようかな、でも…)

改善例

- ・一人一人の表情を確認しながら授業や机間指導を行う
- ・話し合いをする時、児童生徒同士で質問をできるような声掛けをする
- ・振り返りで、分かったことだけでなく分からなかったことも書かせる

優れた指導技術の共有や授業改善の推進

I 今年度の調査・分析結果

II 調査の活用

III 県学調のこれまでの成果

埼玉県学力・学習状況調査のこれまでの成果

今年度で
10回目

県学調

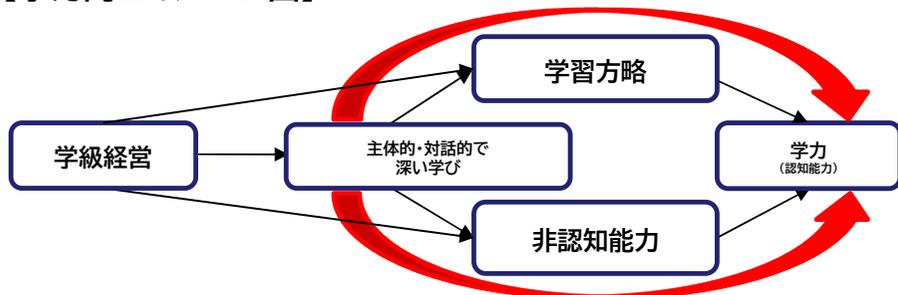
従来の調査「学習したことがしっかりと身に付いているか」

×
自治体初の調査「児童生徒一人一人の学力がどれだけ伸びているのか」

(1) データに基づく証明

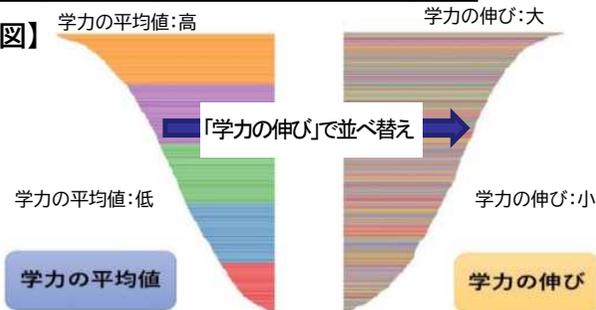
①学級経営の重要性 (平成28年度～令和元年度データ活用事業成果より)

【学力向上イメージ図】



②学力が高い学校 ≠ 学力を伸ばしている学校

【学力と学力の伸びの相関図】



(2) 効果的な取組の把握・普及

①学力をよく伸ばしている学校や学級、教科の把握



②優れた指導技術の共有・普及(映像作成)



- 県学調の結果から、学力を伸ばしている教員を抽出し、その授業を撮影して解説を付加した動画を作成している。
- 県のホームページで動画を公開し、校内研修や年次研修で活用されている。

(3) PDCAサイクルのツールとして定着

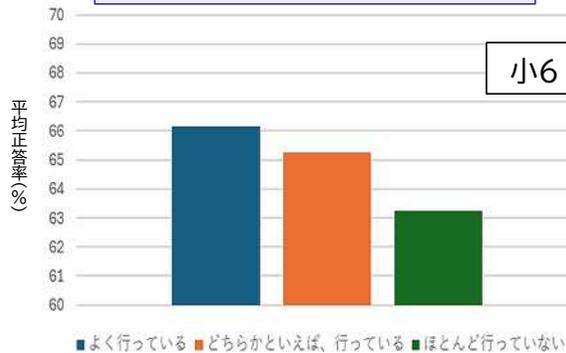
①全国と県の調査結果を基に改善に取り組む学校が多い

質問事項	小学校		中学校	
	埼玉県	全国	埼玉県	全国
全国学力・学習状況調査の結果を地方公共団体における独自の学力調査の結果と併せて分析し、具体的な教育指導の改善や指導計画等への反映を行っていますか	96.4	92.8	90.3	89.3

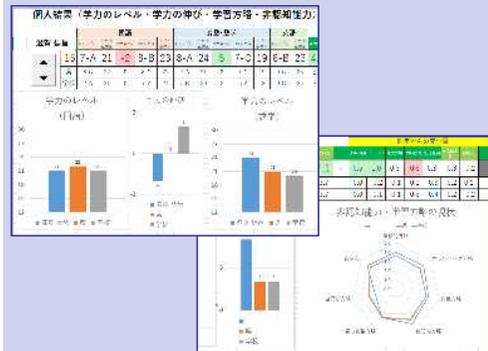
②PDCAサイクルに取り組む学校は平均正答率が高い

○全国と県の調査を併せて分析し、PDCAサイクルを機能させて指導改善に取り組む学校は、全国学調の平均正答率が高い傾向がみられる。

①の質問の回答と平均正答率の関係
(令和6年度全国学調より)

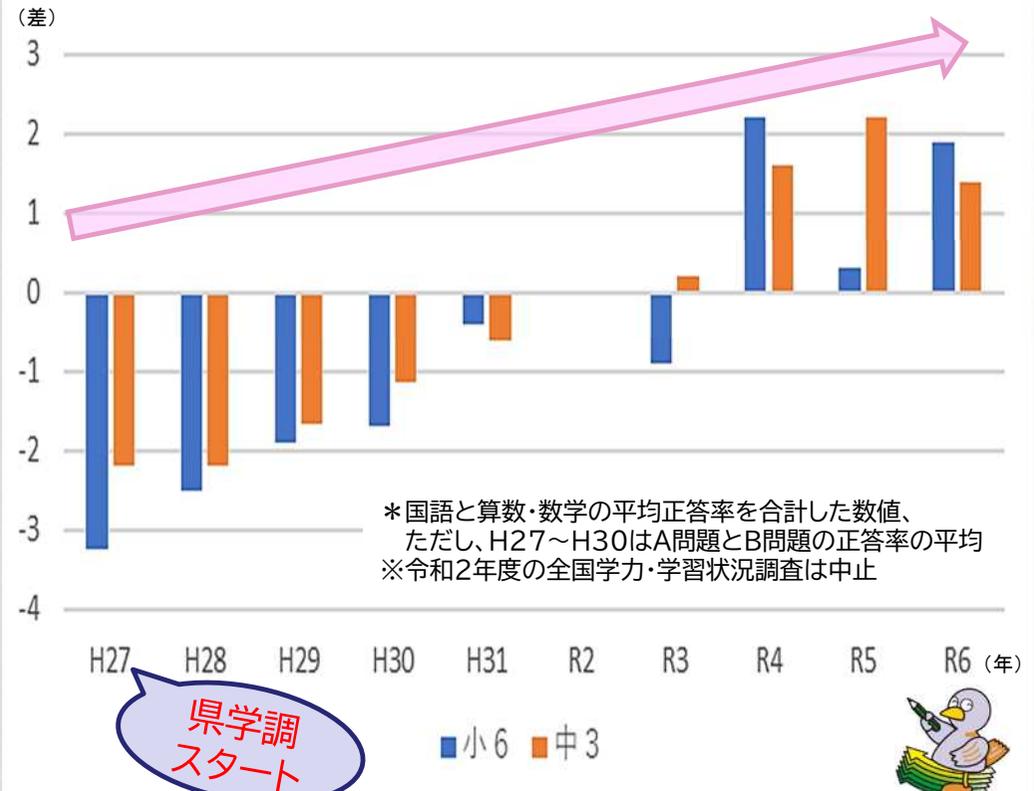


学校に配布している分析ツール



(4) 全国学力・学習状況調査結果の向上

全国と県の正答率*の差



【資料1】令和6年度 県学調の概要

実施期間	令和6年4月24日(水)～5月22日(水) 全62市町村がCBTで実施
調査学校数・ 児童生徒数	県内の公立小・中学校等(さいたま市を除く)に在籍する小学校第4学年から中学校第3学年の全児童生徒 小学校 686校 137,367人 中学校 351校 128,883人 義務教育学校 3校 518人 県立中学校 1校 234人
調査事項	<p>ア 児童生徒に対する調査</p> <p>① 教科に関する調査 (出題数は各学年30～36題、出題形式は選択式・短答式・記述式)</p> <p>小学校第4学年から第6学年まで 国語、算数 中学校第1学年 国語、数学 中学校第2学年及び第3学年 国語、数学、英語</p> <p>② 質問調査 学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項(質問数は学年により97～109項目)</p> <p>イ 学校及び市町村教育委員会に対する調査 学校における教育活動並びに学校及び市町村における教育条件の整備等に関する事項</p>
特長	<p>○学力の伸び(経年変化)などを継続して把握することのできる調査</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校第4学年から中学校第3学年までの同一児童生徒を継続して調査し、学力の伸びを把握 ・PISA(国際学力到達度調査)と同様の調査手法(項目反応理論)を採用 <p>○非認知能力・学習方略を測定することのできる調査</p>

【資料2】県学調の特長①（学力の伸びを測る）

項目反応理論(IRT)

○児童生徒の正答・誤答が、問題の特性(難易度、測定精度)によるのか、児童生徒の学力によるのかを区別して分析し、児童生徒の学力スコアを推定する統計理論のこと。

○本調査では、学力を「学力のレベル」として提示している。
→ 小学校第4学年から中学校第3学年までの全ての問題に難易度を設定することで、学力のレベルを測定している。

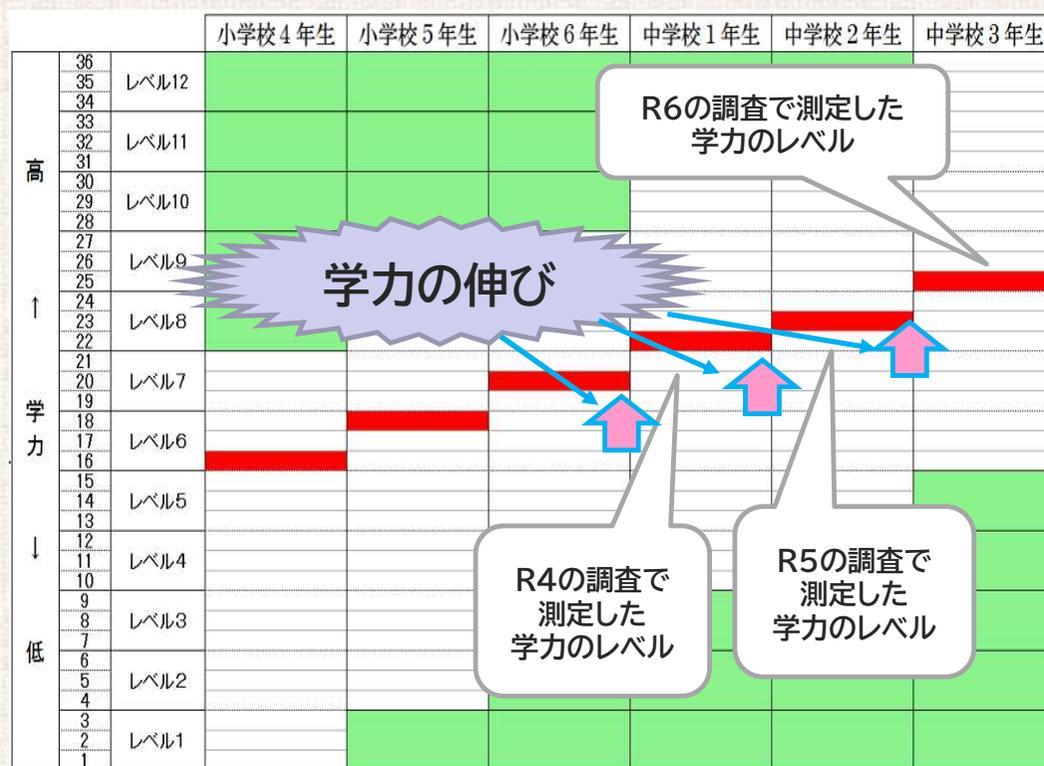
○本調査における「学力のレベル」の考え方

- ・「どのくらい難しい問題を解く力があるか。」を学力のレベルで表している。レベルが上がるほど、難易度の高い問題を解く力がある。

○本調査における「学力の伸び」の考え方

- ・年度間の「学力のレベルの差」を学力の伸びと捉える。

○学力のレベルは、36段階(12レベル×3層)で設定している。



【資料3】県学調の特長②（非認知能力や学習方略）

非認知能力

○認知能力…いわゆる学力であり、たし算、漢字の読み書き、文章題、図形の把握などができる力

○非認知能力…認知能力ではない能力全般

自制心	イライラしない、心の平静を保てる など
自己効力感	自分への自信、自己肯定力 など
勤勉性	やるべきことをきちんとやる など
やりぬく力	粘り強い、根気がある など
向社会性	他者を助けようとする など

※県学調で測っている非認知能力

学習方略

○学習方略…学習の効果を高めるために子供が意図的に行う活動

柔軟的方略

学習の仕方を自分の状況に合わせて柔軟に変更していく活動

<例> 勉強の順番を変える、分からないところを重点的に学習するなど

プランニング方略

計画的に学習に取り組む活動

<例> 勉強を始める前に計画を立てる など

作業方略

ノートに書く、声に出すといった、「作業」を中心に学習を進める活動

<例> 大切なところを繰り返し書く など

認知的方略

より自分の理解度を深めるような学習活動

<例> 勉強した内容を自分の言葉で理解する など

努力調整方略

「苦手」などの感情をコントロールして学習への動機を高める活動

<例> わからないところもあきらめずに継続して学習する など

※県学調で測っている学習方略

【資料4】県の学力向上施策

